

Makiko Tomita Solo Cello Recital 2019 “Gut Feeling!”

Baroque and modern cellos played with gut strings.

富田牧子 チェロリサイタル “ガット弦の魅力”

無伴奏チェロ作品の変遷 その1 バロックと現代のチェロを使って

2019年4月2日《火》7:00pm開演 (6:30開場)

東京オペラシティ 近江楽堂 Oumi-Gakudo, Tokyo Opera City 3F
京王新線 [初台駅] オペラシティ方面出口5分

プログラム

J. S. バッハ: 無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 BWV 1007

J. S. Bach (1685-1750): Suite No.1 in G major for Solo Cello BWV 1007

ダッラーバコ、グラツィアーニ、フランショーム、セルヴェのカプリス

Caprices by G. M. Dall'Abaco (1710-1805), C. Graziani (ca.1710-87),

A. Franchomme (1808-84) and A. F. Servais (1807-66)

J. P. デュポール、ポッパーの練習曲

Etudes by J. P. Duport (1741-1818) and D. Popper (1843-1913)

コダーイ: 無伴奏チェロソナタ 作品8

Z. Kodály (1882-1967): Sonata for Solo Cello Op.8

料金 前売¥4,000 / 当日¥4,500 [12月20日発売]

チケット取扱い 03-5353-9999 東京オペラシティチケットセンター

ご予約・お問合せ 03-5216-7131 アレグロミュージック (平日10~18時)



2019年リサイタルに寄せて

「無伴奏チェロ作品の変遷」と題してはじめる新しいリサイタルシリーズでは、バロックとモダンの2台の楽器、そして様式の違う弓を使い分けて演奏いたします。今回のプログラムは楽器と弓の組み合わせによって、バロック音楽、19世紀の音楽、20世紀のコダーイの3つの部分に分けることができます。

今やバロック音楽をピリオド奏法で演奏するのは当たり前のことになりましたが、フランス革命以降の、音楽や楽器の変化が著しい19世紀の音楽については、世界的にみてもまだ十分な取り組みがなされているとはいえません。今回取り上げる19世紀の作品は、優れた演奏技術を持つチェロ奏者たちによるものです。彼らは交流のあった同時代の大作家たちに刺激を与え、チェロの名曲が生まれるきっかけを作りました。ベートーヴェンの初期のソナタを初演したデュポール、ショパンと親しかったフランショーム、セルヴェ、ポッパーなど、今もチェロ専攻の学生たちが練習に励むカプリスや練習曲を、今回はガット弦を使い、エンドピン無しで弾く、という当時のスタイルで演奏することを試みたいと思います(セルヴェは大きなサイズのストラディヴァリウスを弾くためにエンドピンをしましたが、それはごく例外的なことだったようです)。

そして20世紀に入ると、1915年にハンガリーのコダーイが独創的でスケールの大きなチェロソナタを発表します。一台のチェロとは思えないほどの音の広がりを持つ作品で、かなりの超絶技巧が要求されますが、当時はまだまだガット弦の使用が一般的でした。超絶技巧はスチール弦で弾く方が楽ですが、ガット弦で弾いてみると、ガット弦独特の音域による均一性を求めない、そしてたくさんの倍音成分を持つ性質が、この作品の魅力を際立たせるように感じられます。

自然界の木や波、風などの音のように、抑揚、陰影、音色、表情の奥行きがあり、凹凸のある表現が可能なガット弦で、無伴奏チェロの豊かな世界を楽しんでいただけたら幸いです。

富田牧子

短い昼公演 [60分] もあります。

4月2日〈火〉 3:00pm 開演 (2:45開場)

プログラム——J.S.バッハ:無伴奏チェロ組曲 第1番ト長調 BWV 1007
ダッラーバコ、グラツィアーニ、セルヴェのカプリス
Z.コダーイ:無伴奏チェロソナタより 第1楽章

料金——高校生以上¥2,000 / 小中学生¥1,000 未就学児無料

ご予約 お問合せ —— 03-6317-8916 ベアータ

総合問合せ先 MA企画

kikaku_ma@yahoo.co.jp

Web詳細情報 富田牧子
Makiko Tomita Web Site

http://tomitamakiko.seesaa.net

Makiko TOMITA

幼少時よりヴァイオリンを学び13歳でチェロを始め。東京芸術大学在学中にリサイタルを行い、演奏活動を始める。イタリア、フランス、ドイツ、オーストリアの音楽祭や講習会に参加、ニューヨークでH.シャピロ氏の指導を仰ぐなど、ソロと室内楽(特に弦楽四重奏、ピアノとの二重奏)の研鑽を積む。大学院修士課程修了後ハンガリー・ブダペストに2年間留学、バルトーク弦楽四重奏団チェロ奏者L.メズー氏に師事。NHK-FM「名曲リサイタル」、ORF(オーストリア放送)の公開録音に出演。2005年に東京オペラシティリサイタルホール、2006年にHAKUJUホール、2010年に東京オペラシティリサイタルホール、2012年に青山音楽記念館バロックザール(京都)にてリサイタルを開催。2006年夏から2012年2月まで弦楽四重奏団「クアルテット・アルモニコ」のメンバー。

その後、ピリオド奏法への関心を深め、バロックと現代の楽器にガット(羊腸)弦を張り、様式の異なる弓を使い分けながら、様々な楽器との組み合わせによる「充実した内容の音楽を間近で味わうコンサート」の企画を各地で続けている。J.S.バッハと20、21世紀の作品を組み合わせたサンドイッチ・コンサートも好評継続中。パーカッションのコスマス・カピッツァ氏とのデュオ《羊とヤギ》で、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンなど中世の音楽や民俗音楽を土台に即興を織り交ぜながら独自の世界を展開している。2017年CD「O Terra(大地よ)」をリリース。